

コミュニケーション

No.86

2013.9月1日号

開園40周年号

Contents

P2 ごあいさつ／祝辞

P3 記念誌の発行にあたり／児童動物園時代

P4~21 **大森山動物園
開園40周年記念**

◎40年のあゆみ

◎大森山公園、動物園の持続的な発展に向けて
〈大森山自然動物公園整備構想、動物園の活動〉

◎コミュニケーションのあゆみ

◎大森山動物園で暮らす動物たちの今昔

◎資料〈飼育動物の変遷、入園者数の推移〉

P22・23 大森山アニバーサリー40

P24 飼育日誌／お客さまの声／かたばた通信

[表紙写真] 40周年のテーマ「つながり」の顔となったワオキツネザルの親子





ごあいさつ

秋田市長 穂積 志

大森山動物園は、子どもから大人まで広く市民に愛される施設として、これまで1,000万人近くの方々にご愛顧、ご利用いただき、このたび開園40周年を迎えることができました。これもひとえに動物を愛する方々や関係各位のご理解とご協力の賜とお礼申し上げます。

1973年9月、千秋公園にあった児童動物園を引き継ぎ、ここ大森山公園に移転し、大森山の豊かな自然を活かしながら、ゾウ・キリンの導入や「王者の森」の建設などの整備を進め、現在、約110種740点の動物を飼育展示しております。

2010年には大森山公園と一体化し、動物園を観光資源とした将来像「大森山自然動物公園整備構想」を打ち出し、大森山公園、動物園の再整備を進めております。

現在の大森山動物園は、観光施設としてはもちろん、子どもたちが動物という「いのち」とふれあい、「豊かな感性」を育む人間形成の場として、また大人たちにとっても癒しや憩いの場として、さらには自然環境の急激な変化に伴う野生動物の絶滅が心配される中での種の保存の場、あるいは地域の元気づくりに資する場など様々な役割を担っております。

40周年を迎えた大森山動物園が、50周年、60周年と今後も市民とともに歩み、存続していけるよう、新たな視点と経営感覚で大森山動物園の運営になお一層努めてまいりますので、変わらぬご愛顧とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



祝 辞

秋田市議会議員 鎌田 修悦

秋田市大森山動物園の開園40周年、誠におめでとうございます。

また、開園以来、動物の飼育や、施設の維持・整備にあたってこられた市当局並びにご支援いただいた関係者各位のご労苦とご尽力に敬意と感謝の意を表します。

大森山動物園は40年の歴史の中で展示動物の拡大、施設の拡充や多彩なイベントを通じて日々、魅力向上に努めてこられました。動物園が千秋公園にあった頃を思い出すと、現在の成長ぶりには誠に感慨深いものがあります。

自然豊かな環境の中、様々な動物と出会える大森山動物園は、家族が集い、憩い、心身をリフレッシュするには、またとない場であり、子どもたちの健やかな感性を育み、生命の不思議や尊さを学ぶことのできる施設として、秋田市民に広く親しまれています。加えて県内外からも多くの方が訪れ、本市観光の一翼を担う重要な役割も果たしております。

また、命の尊さが叫ばれる現代社会にあって、「動物と語らう森」をテーマに、より近くで動物を体感できる動物園として、様々な企画に取り組まれているほか、秋田の自然を象徴する希少野生動物のイヌワシの繁殖や希少淡水魚ゼニタナゴ保全などにも取り組んでおります。このように、大森山動物園は施設自体の発展とともに社会や市民の成長にも貢献してきたといえます。市議会といたしましても、かけがえのない郷土のシンボル、財産である「大森山動物園」のさらなる飛躍に向け、市民の皆さまとともに応援してまいりますので、今後とも、魅力ある施設づくりに努められるよう期待申し上げます。

結びに、大森山動物園が一層市民の皆さまに愛され、ますます発展されますことを心から祈念申し上げ、お祝いのことばといたします。



記念誌の発行にあたり

園長 小松 守

大森山動物園、開園40周年にあたり、これまでの歩みの整理と記録、そしてより広く広報できるように、機関誌コミュニケーション86号を記念号と位置づけ発行することとしました。

大森山動物園の原点は、戦後間もない1950年に千秋公園にできた児童動物園に見出すことができます。その思いは、40年前の大森山公園「大森山子どもの国」をつくる時、中心的施設として動物園の移転という形で引き継がれ、一貫して子どもの夢を育む場として発展してきました。

今も大森山動物園は「動物と語らう森」をテーマに掲げながら、子どもの夢を育むことを主流としていますが、時代の要請に合わせ、命の教育やキャリア教育などの教育現場とつながりながら歩んできました。また、家族の語らいの場づくりが難しくつつある現代社会にあって、家族の「幸せ時間」や癒しを提供する場ともなるなど、その役割は広がりを見せております。一方、動物園は一つの社会資本、観光資源としての見方も出始め、企業や大学などが様々な社会活動に活用しようという動きも出るなど、見学だけの動物園から、街づくりという観点でもその役割を担うようになってきています。自然と人との共生という地球規模でのテーマの中、希少野生動物の種の保存、いのちをつなぐ場、そして自然へと誘うきっかけを提供する場としても役割を担うようになるなど、教育文化資本としての動物園を意識しつつ、未来に向けてつながり続けていこうとしています。

40周年のテーマに「つながり」を掲げていますが、本記念誌は、こうした未来への展望をも意識した編集に心がけました。限られた誌面ではありますが、40年の歴史を振り返り、こころ(情)を大事にしてきた動物園の一端を記録として後世に残しつつ、未来を展望する記念誌となれたら幸いです。

児童動物園時代

1950-1973

大森山動物園は、2013年に開園40周年を迎えました。1950年(8月)に秋田県が創設、その後秋田市が引き受け運営してきた千秋公園の児童動物園が、整備が始まった大森山公園へ1973年(9月)に移転してから40年になります。

移転が決まった児童動物園は同年8月10日に閉園し、8月15日から16日にかけて、動物たちも引っ越しました。

大森山「こどもの国」の構想の中に動物園移転が組み込まれましたが、背景には秋田県が児童会館の附属動物園として開設した後、秋田市に移管されて児童動物園として運営されてきた秋田の動物園の歴史があります。動物園の存在意義の根幹は、こどもの夢、心を育む場として捉えてきたのでした。

1953年、秋田市に移管された秋田市立児童動物園の面積は0.4ヘクタール、飼育動物は29種129点、年間利用者が15～16万人でしたが、2013年6月現在の大森山動物園は、約15ヘクタール、動物約110種740点、近年の利用者数も25～30万人と飛躍的な成長を遂げています。



入口



お猿の電車



園内風景

40年のあゆみ



開園当初(1974年)の園内



園内風景



1975年 第1回サマースクール



1973年 開園セレモニー



1980年 サル山築造工事



1981年 サル山完成後

自然に囲まれた 憩いの場がオープン。

1973-1983

1973年9月1日、大森山動物園が開園しました。当時の面積は約8.8ヘクタール、飼育動物は93種280点、開園当初の人気者は児童動物園から引き継いだアシカやライオンでしたが、その後、シマウマ、ダチョウ、カンガルーなどが加わり、園内のにぎわいが増えてきました。1980年にはブラジル秋田県人会からの寄贈でパカが来園し、1981年には京都府宇治田原町で捕獲されたニホンザル33頭を入れたサル山の展示を開始、さらに1982年には中国蘭州市から友好都市条約締結の記念としてフタコブラクダのつがい(オス蘭泉とメス田田)が贈られるなど、動物園は国際

親善動物を含め相次いで整備されました。当時の歴史は、今も続くサル山人気やフタコブラクダの子孫(12頭)を全国に広める功績など、現在の大森山動物園発展の基礎となりました。

動物園のソフト事業が始まったのも開園当初の頃からでした。1975年に「一日飼育係・サマースクール」が、1978年には写生大会など、現在も続く夏の行事が始まりました。

1983年には、開園10周年の記念に、タンチョウの展示やジャイアントパンダ(ランラン)の剥製が資料館で展示され、大勢の方にご覧いただきました。

翌年の1984年、上野動物園所有で米国生まれのオス・シゲタがタンチョウ展示に加わり、タンチョウの展示が強化されました。オスのシゲタは現在も生き続けています。

1985年には、児童動物園から引き継いだライオンのチャコが47頭の出産記録を残して亡くなり、代わりに桐生が岡動物園からオスのリュウとメスのミカがやってきました。

1987年、園内にある沼「塩曳潟」に架かる木製のひょうたん橋がコンクリート製の橋に架け替えられました。また、この年には、繁殖したフタコブラクダとの交換でおびひろ動物園からシンリンオオカミ、旭山動物園からエゾシカが仲間入りしました。

1988年、ブラジル秋田県人会からコモンマーモセット、アカハナグマ、フサオマキザルが寄贈されたほか、小動物との「ふれあい教室」が常設開催となりました。これらは現在の

新世界ザル舎「さるっこ森」、そして「ふれあいランド」へと発展して現在に至っています。さらに、現在の大森山動物園の中心施設とも言えるゾウ・キリン舎の建設計画が秋田市制100周年記念事業として決定したのも、この年でした。

1990年秋には、ゾウ舎完成前に南アフリカからアフリカゾウ2頭(1歳前後)が来園、改造したラクダ舎で越冬させました。翌1991年3月、大型動物舎が完成、ゾウを園内移動させ、また多摩動物公園よりアミメキリンを導入して3月26日にはオープン式が行われました。同年度の入園者数は35万人を超え、過去最高のにぎわいとなりました。

1993年には開園20周年を迎え、記念講演会や式典などで祝い、インコ類を展示する小型鳥類舎の完成やキリンの初繁殖など、話題も豊富でした。

1984-1993

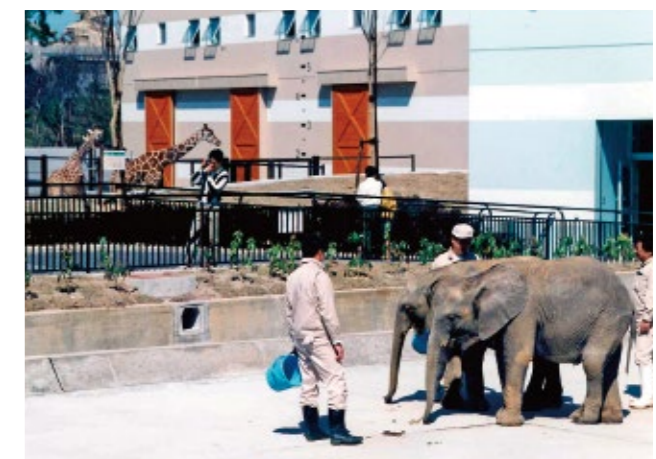
アフリカゾウと アミメキリンが来園。



つがいのタンチョウを飼育



ふれあい教室



1991年 展示を始めた仔ゾウ



1990年 ゾウの搬入



1991年 来園時のキリン



チンパンジーのコブヘイと両親

ふれあいランド
オープン

30周年記念式典

青空シンポジウム

イヌワシの自然繁殖に成功



たいようとジュン



たいようおわかれ会

全国が注目した 義足のキリン「たいよう」。 1994-2003

1994年、ホンドテンの繁殖に成功しました。また翌年にはアネハヅルの人工授精による繁殖にも成功、日本動物園水族館協会から国内動物園で初めての繁殖に与えられる「繁殖賞」を受賞しました。1974年のニホンアナグマ、1978年のメンフクロウ、1990年のジャッカルに繁殖賞に加えて合計5つの受賞となりました。

1996年に生まれたチンパンジーのオス赤ちゃんは、母親のお乳がでなかったこともあり、人の手で育てられました。群れでの社会生活ができるようにと、両親や他のチンパンジーとの接触を密にしたこともあって後に群れに戻ることができ、その後野毛山動物園に移動し父親となりました。

1997年、小動物とのふれあいを目的とした「ふれあいランド」が整備されました。施設にはカピバラ、ペンギン、レッサーパンダ等の野生動物も配置され、なかよしタイムを含め、現在の人気スポットができあがったのもこの時期でした。

1991年に導入したオスキリンの死亡を受け、キリンの種保存を目指すため、1998年、大分の九州自然動物公園からオス・ジュンが陸路約1,700キロを移動し来園しました。ジ

ュンは、その後13年間で後述の「義足のキリン たいよう」を含め、5頭の繁殖に関わりました。

2000年、古くなった猛獣舎改修計画が始まり、2002年にチンパンジーの新しい展示施設「チンパンジーの森」がオープン、ガラス展示ではチンパンジーがお客さまを観察する様子も見られました。

同年、義足のキリン「たいよう」が大きな反響を呼びました。残念ながら闘病3ヶ月で亡くなりましたが、全国からたくさんの激励メールや手紙が寄せられました。リピーター確保を目指して年間利用券(通称パスポート)の発売を開始したのもこの年でした。

2003年、開園当初からあった半円形の猛獣舎、総合動物舎を改修した新猛獣舎「王者の森」が完成し、開園30周年の記念式典と合わせてお披露目されました。同日、子どもたちが未来の動物園を語る「青空シンポジウム」も開催されました。この年、飼育開始から33年目で初めてイヌワシの自然繁殖に成功し、さらに園内の沼で絶滅危惧種のゼニタゴが確認されるなど希少動物にも注目が集まりました。

2004年、新しくできた「王者の森」の新クマ舎でツキノワグマが繁殖、またフンボルトペンギンが複数のペアで繁殖に成功するなど、地道な取り組みの成果が現れた年になりました。

2005年には、動物関連サービス「動物のお食事拝見」を「まんまタイム」として、さらにこの頃から少しずつ「エサやり体験」も加え、飼育員がつくる独自のソフトサービスを常設のイベントにするなど、体験型で楽しむ動物園づくりに努めました。また、この年には、大森山動物園の位置づけや役割、あり方を見つめ直そうと9月に「こどもシンポジウム」を、11月には一般市民を対象にした「明日の大森山動物園を考えるシンポジウム」などが開催され、やがて「大森山動物園条例」の制定へとつながり、翌2006年1月1日から条例が施行されました。この条例を受け、この年の冬から正式な

冬期開園が始まったほか、公募により愛称が「ミルヴェ」に決定しました。

同年、大森山動物園独自のイヌワシ繁殖技術「ローテーション式育雛」を考案、3羽のヒナが巣立ちに成功しました。

この頃、基盤施設改修計画が始まり、2007年には管理事務所と研修ホールを兼ねた施設「ミルヴェ館」、2008年には新動物病院「森のびょういん」、2009年には、財団法人日本宝くじ協会の寄贈による大型遊具「アソヴェの森」がオープン、さらにこの年、将来の動物園と大森山公園の再編整備のための「大森山自然動物公園整備構想」が有識者を含む市民委員でつくられ、2010年に発表されました。飼育職員発案の「アニマル戦隊ミルヴェンジャー7」が誕生したのもこの年で、ステージショーなどでイベントを盛り上げました。

2004-2010

イベントや遊具など 新しい魅力が続々誕生。



まんまタイム



ヒツジのエサやり体験



こどもシンポジウム



明日の大森山動物園を考えるシンポジウム



ミルヴェ館オープン



アソヴェの森



ミルヴェンジャー7



森のびょういん竣工式



キリンのエサやり体験



イヌワシの腕のせ展示



ガラス展示に改修されたトラ舎



さるっこの森



2013年7月 オモリンと浜田小学校のお友だち



2013年3月 ログマーク&イメージキャラクター発表会



移動動物園

さらに楽しく、快適に、常に成長する動物園。

2011-2013

2011年、老朽化した新世界ザル舎を「さるっこの森」として改修、翌年に展示動物3種全ての繁殖につながりました。さらにニホンコウノトリの国内飼育最北での繁殖にも成功しました。

2012年、「もっと近くで。もっと感じて。」をテーマに、にぎわい創出事業により動物とお客さまがより近づけるようにガラス

展示やお客さまが自由に出入りできる施設改修が始まりました。また、秋田公立美術工芸短期大学の地域対応演習で40周年に向けてログマークとイメージキャラクターづくりに取り組んでももらいました。新しく中心市街地にできた「エリアなかいち」のにぎわいづくりと動物園のPRを目的とした、移動動物園も開催しました。

年表で振り返る大森山動物園

1950-1973

- 1950 【7月28日】千秋公園内に「県立児童会館付属児童動物園」として開園
インドゾウのインディラ来秋
- 1953 【4月1日】秋田市に移管「秋田市児童動物園」と改称
- 1954 メリーゴーランド新設
アシカ池新設、アシカ購入
日本動物園水族館協会に加盟
- 1956 ライオン導入
- 1958 お猿の電車登場
- 1970 老ライオンが脱出し射殺される
大森山少年の家オープン
動物園予定地前にSL機関車寄贈設置される
- 1973 【8月10日】大森山移転のため児童動物園を閉鎖
【8月15～16日】大森山へ動物を移動

1973-1983

- 1973 【9月1日】大森山動物園開園
- 1975 動物園夏まつり開催
第1回サマースクール開催
ライオンズクラブから野外ステージが贈られる
- 1976 園内に遊園地オープン(浜田観光株式会社)
- 1977 シマウマ、ツル導入
- 1978 第1回写生大会開催
アカカンガルー導入
- 1979 ダチョウ導入
メンフクロウ繁殖(繁殖賞受賞)
- 1980 ブラジルサンパウロ市から親善動物バカが贈られる
- 1981 サル山オープン(京都府宇治市原町からニホンザル33頭を導入)
- 1982 中国の蘭州市から親善動物フタコブラクダが贈られる
- 1983 開園10周年記念でタンチョウ、ジャイアントパンダの剥製を展示

1984-1993

- 1984 オスのタンチョウを導入
- 1988 ふれあい教室スタート
ブラジルサンパウロ市から親善動物コモンマーモセットなどが贈られる
- 1990 大型動物舎建設用地造成工事完了、大型動物舎建設工事着工
南アフリカ共和国からゾウ2頭を輸入
- 1991 大型動物舎完成(ゾウ、キリン舎)
大型猛禽舎完成(イヌワシ舎)
多摩動物公園からキリン3頭を導入
ゾウ、キリンを公開
冬の動物園観察会スタート
- 1992 水禽池完成(大型フライングケージ)



1977年 シマウマ導入



1979年 メンフクロウ繁殖(繁殖賞受賞)



1995年 ユキヒョウ繁殖



1998年 アビシニアコロブス繁殖

- 1993 開園20周年記念式典開催
夜の動物園スタート
小型鳥類舎完成(インコ舎)
キリン繁殖
- 1994 シロイワヤギ繁殖
ホンドテン繁殖(繁殖賞受賞)
- 1995 アネハヅル人工授精で誕生(繁殖賞受賞)
ユキヒョウ繁殖
- 1996 ワシミミズク導入
チンパンジー繁殖(人工哺育)
- 1997 ふれあいランドオープン
カリフォルニアアシカ繁殖
- 1998 アビシニアコロブス繁殖
九州自然動物公園からキリンのオス「ジュン」が来園
- 1999 ラマ、ケヅメリクガメ導入
- 2000 シフゾウ、ビーバー、ヤマアラシ導入
- 2002 チンパンジーの森オープン
義足のキリン「たいよう」が話題になる
- 2003 開園30周年記念式典開催
猛獣舎「王者の森」オープン
イヌワシ初繁殖
園内にてゼニタナゴの生息を確認(公表)
大森山少年の家閉所

2004-2013

- 2004 ツキノワグマ、ペンギン、ワシミミズク繁殖
- 2005 まんまタイム、エサやり体験開始
- 2006 大森山動物園条例施行
愛称を「ミルヴェ」と決定
雪の動物園スタート
- 2007 研修ホール管理事務所「ミルヴェ館」オープン
軽食コーナー「森のこまち」オープン
大森山ゆうえんち「アニパ」オープン
大森山遊園地閉鎖
- 2008 動物健康管理センター「森のびょういん」オープン
アムールトラ繁殖
- 2009 日本宝くじ協会より大型遊具「アソヴェの森」が贈られる
大森山自然動物公園整備構想策定委員会開催
- 2010 大森山自然動物公園整備構想発表
アニマル戦隊ミルヴェンジャー7が誕生
- 2011 新世界ザル舎「さるっこの森」オープン
ニホンコウノトリ繁殖(日本最北)
- 2012 アカコンゴウインコ人工ふ化・育雛
- 2013 秋田公立美術工芸短期大学生制作によるログマーク、イメージキャラクターを発表
開園40周年

大森山公園、動物園の 持続的な発展に向けて

大森山自然動物公園整備構想

2009年、動物園を含めた大森山公園全体の老朽化への対応と魅力アップによる活性化を目指し、動物園と公園の再整備計画について有識者と市民代表との意見交換を行い、2010年3月「大森山自然動物公園整備構想」が発表されました。「自然と調和し、市民とともに成長し続ける公園づくり」をコンセプトに、5つのキーワード「自然」「観光」「教育」「環境」「協働」を整備方針に掲げています。観光資源を充実させたにぎわいづくりと動物のいのちを体感できる人間形成の場として、さらには自然環境へ思いを巡らす入り口としての役割を果たせるよう、公園と動物園を融合させた構想が示され、それに基づき、具現化に向けて少しずつ動き出しています。

動物園の活動 40周年の歴史の中で

大森山自然動物公園整備構想には5つの整備方針が盛り込まれています。整備方針は、これまで大森山動物園が実践し、広がりを見せてきていた様々な活動について、構想策定委員会による意見交換を受け、整理集約しながらつくられたものです。

40周年の今、これからの道標である、「自然」「観光」「教育」「環境」「協働」の5つのキーワードに添って、これまでの取り組み状況や活動の現状に、未来へ向けた展望も加えながら記録します。

1. 自然

自然とともに息づく 動物園の再整備

大森山動物園では、「いのちをつなぐ」ことを使命の一つとしています。自然を意識しながら、飼育し展示すること、そして種の保存が挙げられます。予算などの制約はあるものの、これまで整備を続けてきた王者の森、チンパンジーの森、さるっこ森、ニホンコウノトリ展示場などは、こうした基本的な考えの下に進められてきた整備です。その背景には常に大森山の自然がありました。特に秋田の自然と強く関わり、保全を主張してきた動物がいます。

一つはイヌワシです。1970年から飼育している最長の飼育歴を持つ動物です。大森山は国内最古の飼育歴を持つ動物園で、前身となる千秋公園の児童動物園時代から飼育を引き継ぎ、今の動物園を代表する動物でもあります。秋田、山形の県境に位置する鳥海山で保護された2羽が創始個体で、オスの鳥海は国内最高齢43才となった今も元気になっています。

イヌワシを守り、育て、伝えるために、1991年には開園当時の小禽舎を生息地の自然環境を意識し、秋田の森を代表するブナを植え、人が近づけない崖地をイメージした大型猛禽舎に改修しました。この年は、ゾウ・キリンの展示が



大型猛禽舎のイヌワシ



イヌワシのひな

始まった年で歴史上の変換期でもありました。完成した大型猛禽舎では、人工授精やペア組み替えなど、種保存の取り組みが精力的に行われました。2003年には大森山として初の自然繁殖に成功、2006年には親鳥と飼育員の子育て(人工育雛)を併用する「ローテーション育雛法」を編み出し、産卵した3個を全てふ化させ3羽とも巣立たせる快挙も成し遂げました。2010年には園内繁殖未経験ペアへの有精卵移動による繁殖を成功させ、さらに2012年に有精卵を盛岡市動物公園へ、13年にはいしかわ動物園へと長距離輸送を経てふ化繁殖成功へと導くことができました。これは秋田の自然との関わりを持ち続けようという大

1.

自然とともに息づく 動物園の再整備

多層・多様・多機能な植生を再生し、自然に溶け込み、自然と調和しながら、動物本来の行動が発現できる飼育展示環境と人にやさしい施設づくり。

2.

新たな魅力による 観光拠点としての 再生

パノラマ展望台の整備と大森山を桜の名所とし、秋田公立美術工芸短期大学(現秋田公立美術大学)などと連携した公園のアート化。

3.

豊かな人間形成に 資する体験学習の 場の創出

希少魚類ゼニタナゴ保全池(ピオトープ)の整備やふれあい体験、環境学習の場づくり。

4.

資源循環システムの 構築とエコへの挑戦

排せつ物の堆肥化や飼料作物栽培場の整備、太陽光発電など新エネルギーの導入による資源循環型社会、低炭素社会への参加。

5.

市民や企業と協働し 成長し続ける つながりの構築

ボランティアガイドやガーデンボランティアなど市民や企業、学校などとの協働体制の構築を図った公園と動物園づくり。

森山動物園の大きなテーマに添った挑戦でもあり、絶滅が危惧されているイヌワシ保全への動物園としての寄与を模索する活動でもありました。このような取り組みが認められ、現在当園は日本動物園水族館協会からイヌワシの種別計画管理園に指定されています。

自然豊かな大森山の環境で命をつなぐイヌワシが、野生イヌワシのために貢献できたり、大森山の自然の中に造られたケージでイヌワシが飛ぶような夢が叶えば、世界に発信できる動物園になるでしょう。

地域に根付くもう一つの動物保全活動を紹介します。2003年、園内にある湖沼「しおひきがた塩曳潟」で、秋田淡水魚研究会の協力を得て行った水生生物調査で発見された日本固有の稀少淡水魚、ゼニタナゴです。20年ほど前までは12都県に分布していましたが、その後急速に数を減らし、現在では東北4県の局所的にしか確認されておらず、環境省と秋田県が絶滅危惧IAに指定しています。塩曳潟は生息地を公表する唯一の湖沼です。ゼニタナゴが激減した理由は様々ですが、ここに生息してきたゼニタナゴは大森山公園と動物園が環境保全の役割を果たし、守られてきたとも言えます。動物園は後世にこの希少な生き物を残すべく、同研究会の力も借りながら保全活動を継続していくべきと考えています。活動の柱は、展示による普及と塩曳潟に隣接



ゼニタナゴの保全活動



ゼニタナゴ

する保全池でのふ化・育成・放流です。こうした活動を知り、賛同した民間からの資金援助などもあり、自然と関わろうとする動物園の活動は少しずつ広がりを見せています。活動は同研究会により生息域内保全例として日本魚類学会へ報告されるなど、専門家の間でも話題になっています。

大森山動物園は、豊かな自然に包み込まれ存在する施設です。イヌワシとともに地域の自然との関わりを大事にした息の長い活動は、必ずや他の飼育動物の展示に重なってくるはずで、命を預かる動物園、自然とともに息づく動物園が大事にし続けなければならないものが、そこにあります。

大森山動物園の前身の動物園は、本市における観光の本丸とも言える城址公園の千秋公園にあった児童動物園でした。県内一のにぎわい通りに接し、常に人が集まる場で、児童動物園は、にぎわいづくりの一翼を担っていました。その動物園が市の南西部に移設され、新たに整備された公園につくられた動物園は当時、市民の憩いの場となる公園施設として捉えられていたようでした。

開園から約10年、新たな施設整備を進めるにあたり、財源確保の手法は観光施設の整備を目的としたものでした。しかし、当時の秋田は未だ動物園が観光資源であるという意識は浸透しておらず、動物園への投資目的や整備の効果は、子どもたちの心を豊かにし、家族が憩う場づくりであるという、児童動物園から引き継いだ変わらぬ意識を大事にし続けていたのです。

近年、交流人口の拡大が重要施策として取り上げられる時代、自然環境や生命への意識変化もあり、動物園を



チンパンジーの森



アソヴェの森



フラミンゴのガラス展示



ヤマアラシのビックリ出窓



動物パレード



おねがいヒントマン



ミルヴェンジャー7



夜の動物園



雪の動物園



アンカ



ゾウ



キリン

動物トレーニング

2. 観光

新たな魅力で 観光拠点としての再生

大森山動物園の役割は、大森山動物園条例の中に、動物のいのちをつなぐ場、いのちを学ぶ場、そして動物との出会いを楽しむ場とあります。動物園は感動的な動物との出会いで心を癒し、レクリエーションとして一時を楽しみながら過ごす、感じ、感動を味わう観光の施設です。開園以来、動物園は集客を一つの大きな指標としてきました。時代とともに人々の感動も変化し続けています。また、少子高齢化が観光に与える影響も大きいものがあります。観光施設として、これまでと現状をみながら再生について展望してみたいと思います。

一つの観光資源として捉える時代に変わり始めました。秋田市でも十数年前から、動物園を重要な観光施策の柱の一つとして動物園への投資も始まりました。

2000年以降、チンパンジーの森や王者の森の整備に着手しました。また老朽化した公園と動物園の基盤整備や研修ホール、動物病院、宝くじ協会からの資金で造られた大型遊具「アソヴェの森」など、近年整備された施設は数多くあります。そして公園と動物を統合した再整備のため、2009年には大森山自然動物公園整備構想づくりに着手しました。現在は、それに基づいた公園と動物園の再整備事業が進められるようになり、加えてにぎわいづくりのための事業が推進されるようになるなど、40年間の歴史の中、2000年以降における観光振興等を目的とした動物園への投資は決して小さなものではありませんでした。

観光資源の拡充で大切なことは、何を伝え、何を感じてもらいたいかを意識し、伝え手の情(こころ)を明確に伝えることです。意識や心の形を表現することは難しいことですが、大森山動物園が10年近く掲げ続けているテーマ

「動物と語らう森」は、ハードとソフトの両面で統一感のあるサービスが提供できるようになってきています。

動物とお客さまのより近い出会いづくりは、動物の中を通り抜けて見学するアソヴェの森や手が届きそうなほど間近に見えるフラミンゴのガラス展示、ヤマアラシのビックリ出窓など、スタッフのアイデア、工夫を体感できることが大森山動物園の特長でもあります。また、「ふれあいフェスティバル」や「夜の動物園」、「雪の動物園」など春夏秋冬を通したイベント、「まんまタイム」や「エサやり体験」など毎日開催しているイベント、さらには動物と飼育員との距離を伝える動物トレーニングの公開など、「動物と語らう森」のテーマに添いながら進化を続けています。

動物園は野生動物を見てもらうことが魅力ではありますが、「動物と語らう森」をテーマに掲げた大森山動物園の情(こころ)を伝えることも重要であると考えています。飼育員と動物、お客さまが一体感を持てる場の強化が大森山動物園の重要な戦略とも言えます。

これは、公園を含めた観光資源の再整備を進めるための大事なキーワードの一つでもあります。

3. 教育

豊かな人間形成に資する 体験学習の場

動物園は動物という「いのち」の出会いやふれあいを通じて、生き物教育、いのちの体験ができる貴重な場の一つです。いのちの大切さや重さなどを伝えるいのちの教育が社会の重要課題の一つになっている昨今、動物園のような生き物を間近にできる場の必要性が高まっています。

大森山動物園では、開園間もない頃からサマースクールや写生大会を開始し、20年以上前からウサギやモルモットなどの小動物とふれあうことができる、ふれあいコーナーを職員の手作りで始めるなど、教育を目的とした動物園の活用を探り続けてきました。

1997年には子どもたち、幼保園児や学校の生徒の生き物体験の受け入れ施設として「ふれあいランド」の施設整備が行われました。運営プログラムも試行錯誤を繰り返しながらの検討が続き、現在では「なかよしタイム」と「ふれあい教室」などのプログラムが確立され、実施されるようになっています。動物園の教育利用を本格的に考え、運営体制のあり方を模索し始めたのがこの頃からです。様々な運営上の課題を抱えた活動ですが、40年の歴史の中、動物園と教育との関わりは、確実に成果が上がっています。

動物園の教育プログラムは幼児、児童の小動物のふれあい体験だけではなく、野生動物との関わりから、生き物教育として「学校向けプログラム」の整備も行ってきました。小学生用の動物学習やエサやり体験、中学生の飼育作業や園内管理作業などは、時に不登校の児童・生徒の校外活動支援などでも評価され、利用され始めています。また、小中高校へ出向く講話や「ミルヴェ教室（出前授業）」なども行っています。

このほか、高校生や専門学校生、大学生などの就業体験や実習、教職員研修などによる動物園の利用も2008年頃から定着してきています。

地域の学校との関わりとしては、大森山公園に隣接する秋田市立浜田小学校3年生の授業で、ゾウ糞による堆肥を活かした飼料作物の栽培とその作物をゾウなどに食べさせる取り組みが1999年から始まり、今では同校の教育プログラムに組み込まれるようになっています。資源循環を学ぶ



サマースクール

ふれあい教室



親子のふれあい写生大会



浜田小学校の活動

学校向けプログラム

この取り組みはゾウ糞の堆肥化事業へと発展しています。

2005年頃からは、秋田県立栗田養護学校生徒の社会参画プログラムの一環として、園内清掃への参加や、2年前からは学校で自ら育苗した花を動物園に植え込むガーデニング活動の場にもなっています。

また、近隣の秋田県立新屋高校による地域貢献活動として、園内整備やイベント時に来園者の笑顔を撮影しプレゼントする写真部の活動、理科研究部による当園ゼニタナゴ保全活動調査への参画など、社会活動参加の場として動物園が活用されています。2012年の塩曳湯の魚類調査では、秋田市立浜田小学校とともに絶滅危惧種のゼニタナゴとシナイモツゴの自然下による確認や、飼育個体数の調査などに貢献しています。

2007年から2009年には、教育委員会との協議の場を設けながら、近隣の小学校に出向く「出前ふれあい教室」という取り組みの試みなども行われましたが、体制が整わず休止状態となっている事業もあります。

動物園と教育との関わりを展望するにあたり、教育に焦点を絞った動物園の活用と運用のあり方という大きな枠組みの中において、秋田市だけでなくとどまらず社会全体で考える必要性が高まっています。

4. 環境

資源循環とエコで 未来へつなぐ

動物園の重要なテーマに、「自然環境の調和」と「自然とそこに住む野生動物の保全」があります。環境に負荷をかけない優しい動物園であることが望ましいのですが、残念ながら様々な人間活動にはどうしても自然への負荷を伴います。動物園ではこうした負荷の縮減にも少しずつ取り組んできました。

動物園で発生する排泄物処理もその一つです。排泄物の廃棄物処理にはコストとともに化石燃料を燃やすなどの環境負荷も発生します。飼育するゾウなどの草食動物の排泄物や敷ワラの量は決して小さなものではなく、現在1日約700キロ、年間約250トンにもなり、2009年から公的助成金を活用した堆肥化事業が進められました。

排泄物や使用済みの敷ワラなどを発酵、熟成、乾燥して製品化した結果、年間約100トンの完熟堆肥をつくることができました。発酵促進のために使用したバク菌（DB9011株）は、有害菌の死滅や臭気抑制などによって良質な堆肥づくりには有効で、堆肥は連作障害や土壌改良剤とした効果が大きく、園内や学校花壇のほか、最近では農家の野菜栽培にも使われるようになってきています。「大森山動物園ゾウさん堆肥」と名付け、一定品質と一定の量で生産することが可能となり、商標登録を行い2012年からは市販を開始しています。

将来、野菜や果樹農家等との提携を図った「大森山動物園ゾウさん堆肥」でつくったゾウさん〇〇などといった野菜の生産・加工・販売等が話題となることもあるかもしれません。

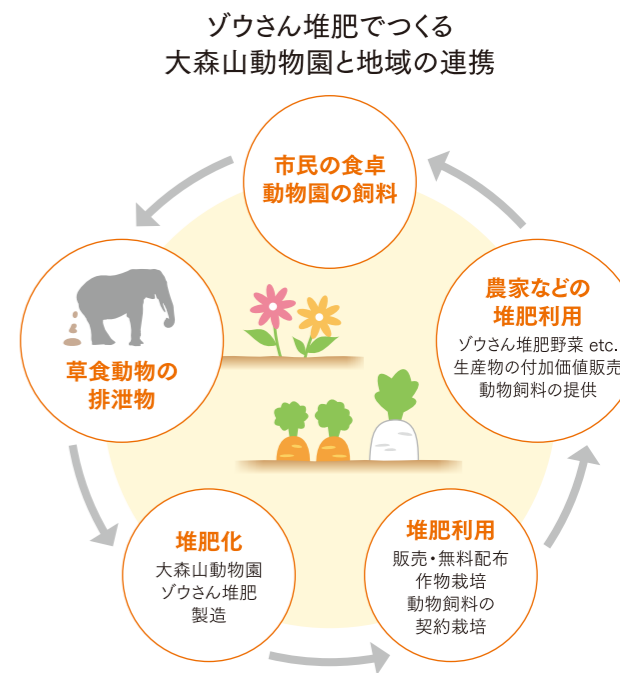
一方、環境に優しい動物園、省エネルギー化事業として2012年に、日当たりの良いミルヴェ館動物園事務所屋上に太陽光パネルを設置しました。再生可能エネルギー利用の実践や、温室効果ガスの抑制など、環境にやさしい低炭素社会に向けた取り組みにも一役買っています。約10キロワットの発電機能を持つ太陽光発電を設置し、動物園が年間使用する電力約14万キロワットの1パーセント程度ではありますが、動物園のこのような取り組みをアピールすることも重要であると捉え、研修ホールでは発電状況をリアルタイムで見ることができるようにしています。このほか、カピバ



大森山動物園ゾウさん堆肥



堆肥により成長した飼料作物



太陽光発電装置



カピバラ舎の断熱化

ラ舎とレッサーパンダ舎の断熱化を進めてエネルギー効率を図るなど、近年話題の省エネ事業にも動物園は積極的に取り組んでいます。

地球の動物たちは、地球の環境によって生かされています。動物のいのちに直結する動物園の運営は人間活動の一つとして、地球への負荷は避けられません。しかし、希少な生き物たちの種の保存や自然環境の保全の必要性を主張する動物園は、その負荷をできるだけ小さくする努力をし、可能な限り地球や自然に優しい動物園づくりを主張していくべきと考えます。

5. 協働

様々なつながりで 成長する動物園

今年、つながりをテーマに開園40周年を祝っていますが、40年の歴史の中、これまで大学や企業、多くの団体や市民など様々なつながりの中で動物園は成長を続け、近年、そのつながりは、より広く、そして強さを増してきています。

動物園と企業や団体等との連携、つながりは大森山動物園の開園当初からすでにその原型がつくられて来ました。開園間もない頃から開催してきた写生大会は、子どもたちの芸術を通じた人間形成に大いに寄与してきた事業と言えますが、これには秋田市造形教育研究会の長年にわたっての献身的な指導や経済的あるいは広報活動で支援をいただいている地元放送局（秋田テレビ株式会社）、文具メーカー（株式会社ぺんてる等）などの企業支援抜きにして語ることはできません。

秋田公立美術工芸短期大学（現秋田公立美術大学）は、動物園が目指すアート化の意向を受け、アート&ハートプロジェクトとして地域対応演習の授業に取り入れ、動物園へのアプローチ道路のアート化など、若い感性で動物園のアート化に力を注いでいただきました。さらに今年の開園40周年の記念として、ロゴマークとイメージキャラクター「オモリン」の制作に取り組み、新しい大森山動物園のイメージづくりに大きく貢献してくれました。今年から秋田公立美術大学となりましたが、これからも双方の関係性構築を模索していきたいと考えています。

一方で、市民型動物園としても運営されてきた動物園の典型的な活動もあります。2002年に誕生したボランティアガイド「たいようの会」があります。毎年20～30名ほどが活動し、動物ガイドや各種イベント、エサやり体験、なかよしタイムなど献身的にサポートしてくださり、動物園活動の大きな力になっています。また「嘴を折ったニホンコウノトリ、タイサ」や「義足のキリン、たいよう」などの自作の紙芝居を披露するなど、子どもたちの心の育成にも取り組んでいます。

2003年に始まったガーデンボランティア制度には現在約30のグループが花壇づくりに汗を流してくださっています。「大森山動物園は花がきれい」と評するお客さまが多く、まさにガーデンボランティアさんの力とも言えます。



秋田公立美術工芸短大 アート&ハートプロジェクト



ボランティアガイド



大森山動物園応援会



ボランティア塗装

ガーデンボランティア

園内企業との関係性も重要です。動物園を楽しみにしているお客さまは、動物の見学だけではなく、食べたり、遊んだりという総合的なレジャー施設として捉えることが多く、園内にある遊園地「アニパ」や軽食「森のこまち」は、開園当初からあった浜田観光株式会社に代わって、それぞれ2007年から、動物園と密接な関係性を保ちながら来園者に対しレクリエーションの場を提供いただいています。動物園の運営上、重要な要素を担ってくれている大切なパートナーであり、動物園発展に力を発揮してもらっています。

このほか、民間事業所からの様々な支援も動物園の大きな支えとなっています。秋田市の塗装業者団体からはボランティア活動として毎年のように園内の老朽化した施設を塗装していただいております。多くの企業や団体からはお客さま用のベンチ寄贈や植樹など様々な形で支援をいただき、動物園とのつながりを構築しています。

さらに特別な支援として特筆したいのが、動物が食べるエサの寄贈です。果樹組合によるリンゴ、パン屋からの相当量のくずパン、果物、稲藁、ひまわりの種、胡桃など企業から個人に至るまで、年間約100万円相当の飼料支援を受けています。

つながりの中、2011年には「大森山動物園応援会」も組織されました。2009年につくられた「大森山自然動物公園整備構想」について話し合う連帯の中から産声を上げた会であり、開園40周年記念事業実行委員会の中核を担っています。

県民の思いで誕生した千秋公園の動物園は、秋田市民が受け継いだ市立の児童動物園となり、やがて大森山公園に移りました。それから40年、こうした支援が続いているということは、秋田の人々にとって動物園を大事な存在として捉えていただいている証拠でもあります。このつながりをいつまでも大事にしたいものです。

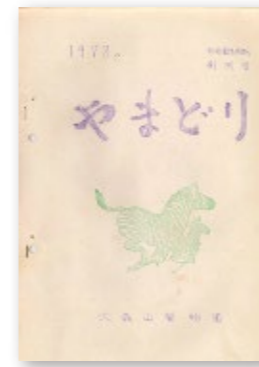
「コミュニケーション」のあゆみ

大森山動物園の機関誌の歴史を振り返ってみたいと思います。現在の機関誌「コミュニケーション」がスタートする以前、1978年から1986年までの9年間16号にわたり続いた大森山動物園機関誌「やまどり」（秋田県の鳥）がありました。手書きとタイプライター打ちによる「青焼き」の機関誌は、当時の動物園の技術や経済状態、歴史をよく表しています。職員と社内関係者向けとして部数も内容も規模の小さい記録誌ではありますが、動物園の記録を残そうと懸命に取り組んだ様子が見て取れます。

こうした背景の中、機関誌づくりには大きな抵抗もなく、本格的な記録保存と情報発信の機運が沸き起こり、1989年5月にはイラストを切り貼り、コピーなどの手作りによって「動物園だより」が誕生し、それを格上げしようと1990年、現在の「コミュニケーション」第1号が創刊されました。全国の動物園における機関誌の発行は、首都圏の大きな動物園や地方であっても大都市の有力動物園に限られている中、地方都市秋田の動物園による発行は珍しいことでした。

1992年にはカラー印刷1回が加わり、通常の手作りによる機関誌5回と合わせ年6回の発行を行い、この発行には相当の労力が費やされていました。さらに、1994年9月からは機関誌の誌面制作から印刷までの全てを業者へ発注することが可能となり、誌面の見やすさが格段と上がりました。

1998年から2007年までの表紙には当園飼育員の佐藤一男氏の動物イラストが使われ、味わいのある画風が好評となりました。2008年10月号から全ページカラー刷りとなり、内容も充実させ、年2回の発行に移行しました。近年における誌面の特徴として、2006年2月号に「大森山動物園条例」施行特集号を、2008年1月に「地方（秋田）の動物園を語る」シンポジウム特集号を、さらに2010年10月には秋田の動物園ができて60周年を記念した特集号を組みました。そして2013年発行の本誌86号は、開園40周年を記念する特集号として発行することとしました。これからも大森山動物園の「こころ（情）」を発信する大事な機関誌、そして文字として残る重要な記録誌として、継続し進化させていきたいものです。



1978年「やまどり」創刊号



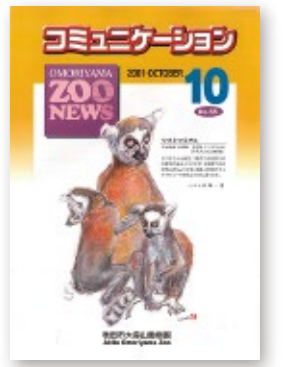
1990年6月号（第1号）



1992年 No.1号



1999年 No.39号



2001年 No.55号



2008年 No.75号



2010年 No.80号



2013年 No.86号

〔哺乳類〕

- 霊長目
 - ジェフロイクモザル
 - サバンナモンキー
 - ダイアナモンキー
 - タイワンザル
 - カニクイザル
 - アカゲザル
 - ブタオザル
 - マントヒヒ
 - アジルテナガザル
 - シロテナガザル
 - チンパンジー
- 食肉目
 - ホンドタヌキ
 - ホッキョクグマ
 - ニッポンツキノワグマ
 - アライグマ
 - ニッポンアナグマ
 - ミンク
 - マレージャコウネコ
 - ピューマ
 - ライオン
 - ヒョウ
 - クロヒョウ
 - ベンガルトラ
- 蹄脚目
 - カリフォルニアアシカ
 - ゴマファザラシ
- 奇蹄目
 - ドウサンバ
- 偶蹄目
 - ニホンイノシシ
 - ニホンジカ
 - キョン
 - バーバリシープ
 - コビトコブウシ
 - ミミナガヤギ
- げっ歯目
 - ニホンリス
 - フサオヤマアラシ
 - テンジクネズミ
- ウサギ目
 - カイウサギ雑
- 〔鳥類〕
 - ペンギン目
 - フンボルトペンギン

ペリカン目

- モモイロペリカン
- ウ(種不明)
- コウノトリ目
 - アオサギ
 - ゴイサギ
- フラミンゴ目
 - チリーフラミンゴ
- ガンカモ目
 - オシドリ
 - マガモ
 - アヒル
 - カルガモ
 - シナガチョウ
 - オオハクチョウ
 - コブハクチョウ
- ワシ・タカ目
 - ニホンイヌワシ
 - ノスリ
 - ハゲワシ
 - シロハラウミワシ
 - カンムリワシ
 - トビ
 - ハヤブサ
- キジ目
 - キンケイ
 - カツラチャボ
 - チャボ雑
 - ヒナイドリ
 - トウテンコウ
 - キンパドリ
 - ギンシヨクセブライト
 - ショウコク
 - コシャモ
 - シチメンチョウ
 - ホロホロチョウ
 - インドクジャク
 - コウライキジ
 - ニホンキジ
 - キンシヨクセブライト
- ツル目
 - クロヅル
 - バン
- チドリ目
 - ウミネコ
 - オオセグロカモメ
- ハト目
 - デンシヨバト

クジャクバト

- ジャコピン
- キジバト
- オウム目
 - オカメインコ
 - アオボウシインコ
 - キボウシインコ
 - ルリコンゴウインコ
 - アカコンゴウインコ
- カッコウ目
 - アカアシジカッコウ
- フクロウ目
 - コノハズク
 - ホンドフクロウ
- スズメ目
 - カワラヒワ
 - ベニスズメ
 - ブンチョウ
 - ジュウシマツ
 - カササギ
 - ミヤマカケス

〔爬虫類〕

- カメ目
 - ドロガメ
 - ニホンイシガメ
 - インドホシガメ
- 有鱗目(へび壺目)
 - インドニシキヘビ
- ワニ目
 - メガネカイマン

開園当初の展示動物種



〔哺乳類〕

- 有袋目
 - アカカンガル
- 食虫目
 - ヨツユビハリネズミ
- 霊長目
 - ワオキツネザル
 - エリマキキツネザル
 - ノドジロオマキザル
 - ポリビアリスザル
 - コモンマーモセット
 - ワタボウシパンシユ
 - ダイアナモンキー
 - ホンドザル
 - マントヒヒ
 - チンパンジー
- 食肉目
 - シンリンオオカミ
 - ホンドタヌキ
 - ホンドギツネ
 - ツキノワグマ
 - レッサーパンダ
 - アライグマ
 - ホンドテン
 - ニッポンアナグマ
 - ハクビシン
 - ミーアキャット
 - ベンガルヤマネコ
 - ピューマ
 - ライオン
 - トラ
- 蹄脚目
 - カリフォルニアアシカ
- 長鼻目
 - アフリカゾウ
- 奇蹄目
 - ポニー
 - ミニチュアホース
- 偶蹄目
 - ミニブタ
 - フタコブラクダ
 - ラマ
 - ワピチ
 - キョン
 - トナカイ
 - キリン
 - マーコール
 - シバヤギ

- コリデール
- 雑種ヒツジ
- げっ歯目
 - プレリードッグ
 - ホンドリス
 - アメリカビーバー
 - アフリカタテガミヤマアラシ
 - カナダヤマアラシ
 - テンジクネズミ
 - カビバラ
- ウサギ目
 - ジャンボウサギ
 - ライオンウサギ
 - ロップイヤー
 - 雑種ウサギ

〔鳥類〕

- ヒクイドリ目
 - エミュー
- ペンギン目
 - フンボルトペンギン
- ペリカン目
 - モモイロペリカン
- コウノトリ目
 - ニホンコウノトリ
 - シュバシコウ
 - ショウジョウトキ
 - ホオアカトキ
 - ブロンズトキ
- フラミンゴ目
 - チリーフラミンゴ
 - ヨーロッパフラミンゴ
- ガン・カモ目
 - コールダック
 - ヨーロッパガチョウ
 - インドガン
 - コクチョウ
 - オオハクチョウ
- タカ目
 - イヌワシ
 - モモアカノスリ
 - クマタカ
 - チョウゲンボウ
- キジ目
 - コエヨシドリ
 - キンパドリ
 - ヒナイドリ
 - ウコッケイ

開園当初から展示している動物種



飼育動物の変遷

1973-1984

種 類	飼育開始日
ウコッケイ	1974年 6月 22日
マガン	〃 8月 30日
インドガン	〃 8月 30日
コクチョウ	〃 8月 30日
シロクジャク	〃 8月 30日
マクジャク	〃 8月 30日
ヤギ雑	〃 12月 25日
シロミミキジ	〃 12月 25日
マレーグマ	1975年 4月 20日
ポリビアリスザル	〃 5月 12日
オージュボンカラカラ	〃 6月 22日
メンフクロウ	〃 7月 4日
ベニイロフラミンゴ	〃 8月 13日
アカハナグマ	1976年 2月 19日
ベンガルヤマネコ	〃 2月 21日
イワシャコ	〃 4月 12日
ニジキジ	〃 4月 12日
ハッカ	〃 4月 12日
オナガキジ	〃 4月 12日
ニホンカモシカ	〃 5月 5日
ダルメインコ	〃 6月 17日
ムツアシガメ	〃 6月 17日
サンケイ	〃 7月 16日
キタヤマドリ	〃 7月 16日
トラフズク	〃 8月 3日
ヨーロップフラミンゴ	〃 8月 5日
パルマワラビー	〃 8月 17日
ソウゲンワシ	〃 8月 17日
クロエリハクチョウ	〃 9月 5日
ギンケイ	〃 9月 25日
オジロコシアカキジ	〃 9月 25日
セグロカモメ	1977年 1月 15日
セキセイインコ	〃 3月 30日
五色セイガイインコ	〃 3月 30日
ヒインコ	〃 3月 30日
ルリコシボタンインコ	〃 3月 30日
コザクラインコ	〃 3月 30日
ハイロベリカン	〃 6月 1日
ホンドテン	〃 6月 7日
グラントシマウマ	〃 6月 28日
シロエリオオヅル	〃 6月 28日
カンムリヅル	〃 9月 12日
マゼランペンギン	〃 11月 30日
ミサゴ	1978年 3月 12日
アネハヅル	〃 5月 19日
ホオジロカンムリヅル	〃 5月 28日
アカカンガルー	〃 7月 25日
カラヤマドリ	〃 11月 11日
ダチョウ	1979年 4月 10日
カナダガン	〃 4月 29日
エジプトガン	〃 4月 29日
コエヨシドリ	〃 5月 27日
ミカドキジ	〃 8月 30日
綿羊	〃 9月 13日
シマハッカ	〃 9月 17日
クマタカ	〃 11月 26日
ホンドザル	1980年 3月 20日
バカ	〃 5月 13日
タイハクオウム	〃 5月 30日
トウホクノウサギ	〃 6月 23日
サンバ	〃 9月 7日
サバンナホーク	〃 9月 20日
シロトキ	〃 11月 4日
キタキツネ	〃 12月 2日
ノドジロオマキザル	1981年 1月 16日
ベニコンゴウインコ	〃 4月 14日
クサガメ	〃 4月 30日
リュウキュウイノシシ	〃 7月 14日
ミドリコンゴウインコ	〃 10月 12日
アオミミキジ	1982年 2月 5日
フタコブラクダ	〃 4月 1日
タンチョウ	1983年 7月 18日

1984-1993

種 類	飼育開始日
ジュズカケバト	1984年 10月 1日
コハクチョウ	1985年 3月 19日
コミミズク	〃 4月 10日
ミーアキャット	〃 7月 2日
ハクビシン	1986年 7月 4日
フェレット	〃 10月 28日
オオコノハズク	〃 11月 19日
エゾリス	〃 12月 1日
イワトビペンギン	1987年 3月 11日
ハイロコクジャク	〃 3月 31日
トカラヤギ	〃 5月 1日
シンリンオオカミ	〃 8月 24日
エゾシカ	〃 8月 24日
トナカイ	〃 11月 5日
セグロジャッカル	1988年 4月 1日
バリケン	〃 4月 12日
コモンマーモセット	〃 11月 22日
シュバシコウ	〃 11月 28日
フサオマキザル	〃 12月 1日
ビルマカラヤマドリ	1989年 3月 23日
ワオキツネザル	〃 3月 31日
ホンドキツネ	〃 3月 31日
シベリアヘラジカ	〃 3月 31日
エゾユキウサギ	〃 3月 31日
ヨーロッパガチョウ	〃 12月 28日
アフリカゾウ	1990年 9月 30日
シマハイエナ	〃 11月 6日
オオタカ	〃 11月 8日
チョウゲンボウ	〃 11月 8日
チョウセンオオタカ	1991年 1月 16日
アミメキリン	〃 3月 29日
クロトキ	〃 12月 9日
ユキヒョウ	〃 12月 10日
ワライカワセミ	〃 12月 20日
ブロンズトキ	1992年 2月 14日
ショウジョウトキ	〃 4月 2日
ヒドリガモ	〃 4月 2日
マナヅル	〃 4月 17日
シロイワヤギ	〃 5月 29日
コガモ	1993年 3月 25日
オオバタン	〃 4月 13日

1994-2003

種 類	飼育開始日
カリガネ	1994年 3月 25日
カカバ	1995年 3月 24日
マーラ	〃 4月 25日
グリーンイグアナ	1996年 3月 22日
ワシミミズク	〃 4月 11日
ジャガー	〃 11月 8日
ニホンコウノトリ	〃 11月 14日
カピバラ	〃 11月 20日
シェットランドポニー	1997年 3月 31日
ニュージーランドポニー	〃 3月 31日
ホルスタイン	〃 3月 31日
ジャージー	〃 3月 31日
コリデール	〃 3月 31日
ロップイヤード	〃 3月 31日
ライオン	〃 3月 31日
アマサギ	〃 3月 31日
コサギ	〃 3月 31日
シセンレッサーパンダ	〃 4月 7日
エリマキキツネザル	〃 9月 17日
アビシニアコロブス	〃 9月 17日
ケヅメリクガメ	〃 9月 23日
ミニブタ	〃 12月 10日
フレミッシュジャイアント	1998年 3月 17日
ラマ	1999年 3月 17日
ムフロン	〃 3月 17日
シマリス	〃 5月 31日
コールダック	〃 11月 26日
シフゾウ	2000年 2月 9日
シロフクロウ	〃 3月 10日
サンショクキムネオオハシ	〃 3月 10日
アフリカタテガミヤアラシ	〃 3月 15日
カナダヤマアラシ	〃 3月 15日
カンムリキジ(エボシキジ)	〃 4月 20日
ユースネーク(アカオダイショウ)	〃 7月 4日
コロンビアレインボーポア	〃 7月 21日
アメリカビーバー	〃 9月 12日
ビルマニシキヘビ	2001年 3月 7日
ヨツユビハリネズミ	〃 3月 15日
ヒメウズラ	2002年 10月 8日
シュモクドリ	2003年 3月 6日
プレーリードック	〃 3月 11日
キバタン	〃 3月 17日
キュウカンチョウ	〃 3月 31日
ワタボウシバンシエ	〃 4月 23日
エミュー	〃 6月 26日



フタコブラクダ



セグロジャッカル

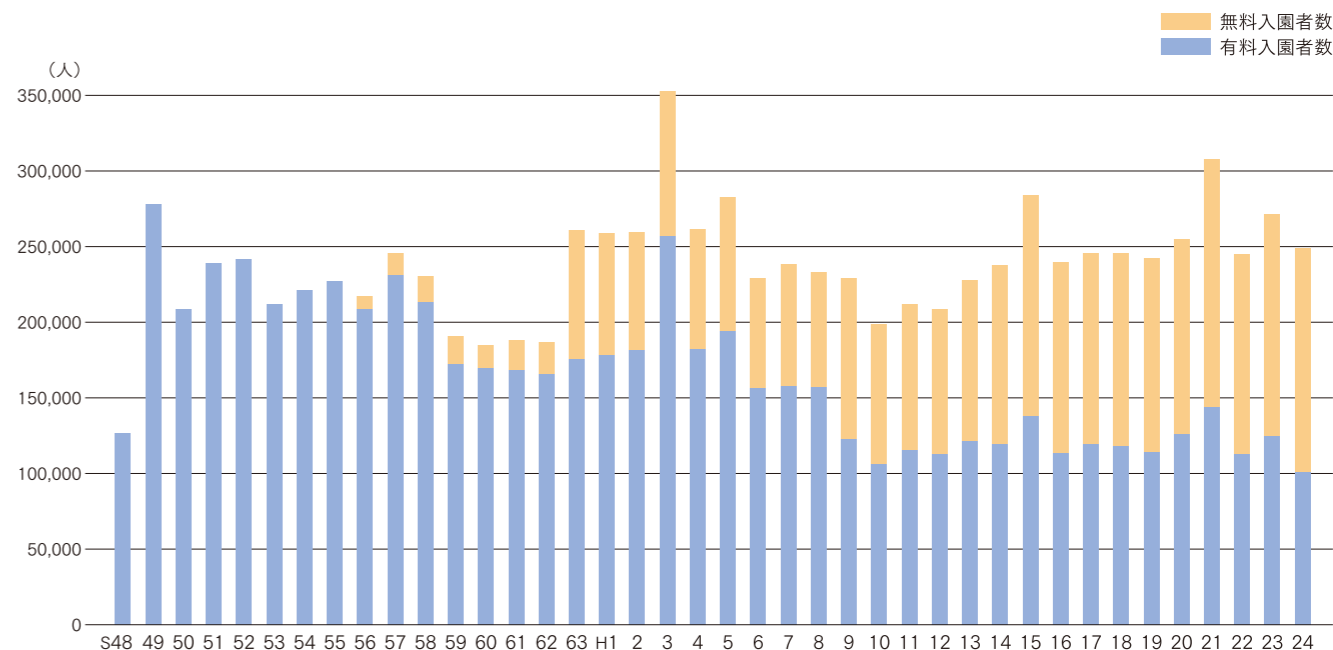


シマハイエナ



ジャガー

入園者数の推移



年度	有料入園者数	無料入園者数	総入園者数	備 考
S48	126,897	—	126,897	9/1開園
49	278,023	—	278,023	
50	208,495	—	208,495	
51	238,866	—	238,866	
52	241,738	—	241,738	有料入園者数100万人達成(8/7)
53	211,806	—	211,806	
54	221,454	—	221,454	
55	227,175	—	227,175	
56	208,985	8,403	217,388	サル山オープン、料金改定(100円→200円)
57	231,483	13,955	245,438	フタコブラクダ来園、有料入園者数200万人達成(5/1)
58	213,660	17,116	230,776	
59	173,102	17,928	191,030	
60	169,680	15,205	184,885	
61	168,880	19,282	188,162	
62	166,522	20,531	187,053	
63	175,558	85,311	260,869	有料入園者数300万人達成(6/14)
H1	178,860	80,074	258,934	
2	182,102	77,773	259,875	
3	257,010	95,733	352,743	大型動物舎オープン、入園料改定(200円→400円)
4	182,727	79,234	261,961	有料入園者数400万人達成(8/5)
5	194,504	88,345	282,849	
6	156,551	72,634	229,185	
7	158,091	80,265	238,356	
8	157,704	75,913	233,617	
9	123,362	106,182	229,544	ふれあいランドオープン、料金改定(400円→500円、子ども無料)
10	106,868	92,062	198,930	
11	115,875	96,591	212,466	有料入園者数500万人達成(5/9)
12	113,396	95,581	208,977	
13	122,115	106,033	228,148	
14	119,536	118,323	237,859	チンパンジーの森オープン、パスポート販売開始
15	138,469	145,636	284,105	王者の森オープン
16	113,432	126,324	239,756	
17	119,717	126,086	245,803	大森山動物園条例施行
18	118,576	127,051	245,627	ミルヴェ館オープン、総入園者数777万人達成(7/11)
19	114,802	127,805	242,607	森のびょういんオープン、総入園者数800万人達成(6/8)
20	126,568	128,864	255,432	アソヴェの森オープン
21	144,305	164,021	308,326	
22	112,888	132,170	245,058	さるっこの森オープン
23	124,725	146,526	271,251	総入園者数900万人達成(5/4)
24	101,559	147,843	249,402	料金改定(500円→700円)、回数券販売開始
合計	6,646,066	2,834,800	9,480,866	

様々なイベントで秋田を元気に!

大森山アニバーサリー40

開園40周年記念事業として「つながり」をテーマに掲げ、秋田の財産である動物園が過去から未来につながり続けること、また多くの市民や企業等とのつながりで動物園がより成長できることなどを目指し、「～大森山アニバーサリー40～」と銘打ち秋田の元気に結びつく様々なイベントを企画しました。

ロゴマークとイメージキャラクター

大森山動物園開園40周年を記念して、新しいロゴマークと動物園のイメージキャラクターが誕生しました。デザインは秋田公立美術工芸短期大学の学生さんで、平成24年度後期授業において制作したデザインを採用しました。

ロゴマーク

【制作者】

小野寺 愛香さん、佐藤 碧衣さん、藤岡 花奈子さん、高橋 彩さん

【制作意図】

訪れた人が動物たちのふれあう姿をみて、同じようにふれあうことの暖かさを感じてほしいと思い、親子が手で動物を作って語り合う様子と動物の親子が戯れている様子を重ねた。また、葉の形で大森山動物園の特徴である豊かな自然が一目で見て分かるロゴマークを作成した。



イメージキャラクター「オモリン」

【制作者】

岩崎 菜月さん、斉藤 光太郎さん、高橋 祥子さん、高橋 真帆さん、藤原 さやかさん

【オモリンの3大特徴】

みんなの声がきこえる大きな耳、みんなを包み込めるおおきな手、人と動物と森をつなぐリボン。

【オモリンのプロフィール】

子どもが大好きで、大森山動物園のみんなに会うとついつい抱きしめたくなる大森山の主。とても物知り。

- 住んでいる場所／大森山のてっぺん
- 好きなこと／ぎゅっとする
- 得意なこと／口ぶえ
- たからもの／草のリボン
- ゆめ／全国のみんなに会うこと
- 好きな食べ物／リンゴ



～大森山アニバーサリー40～ イベントレポート

ゴールデンウィーク特別企画

スタンプラリー オモリンを探せ!

大森山動物園と大森山ゆうえんちアニパ、軽食コーナー森のこまちの共同企画。4月27日から29日までの3日間限定で、大森山動物園のイメージキャラクター「オモリン」のスタンプラリーを実施しました。

大森山動物園の軌跡 パネル展

1950年(昭和25年)秋田県立児童会館の附属施設としてスタートした児童動物園から、現在の大森山動物園までの歴史を振り返るパネル展を開催。大森山動物園の歴史のほか、動物園の活動や思い出の動物たちなども紹介しています。(12月1日まで)

春の動物ふれあいフェスティバル

40周年を記念して動物たちの展示場内に入る「四獣スペシャル体験」を実施。動物たちが普段過ごしている展示場に入って、動物たちの目線を体感していただきました。



スタンプラリー オモリンを探せ!



「大森山動物園の軌跡」パネル展



春の動物ふれあいフェスティバル (左)テンパンジー展示場 (中、右)動物パレード

秋田市大森山動物園 開園40周年記念事業実行委員会

40周年となる開園日を盛り上げようと、大森山動物園応援会や各団体等にご協力いただき、平成25年4月18日に秋田市大森山動物園開園40周年記念事業実行委員会を立ち上げました。実行委員会では、8月31日開催の大森山公園全体を活かしたイベント「森と動物の音楽祭」と9月1日開催の「開園40周年を祝う会」を中核イベントとし、準備を進めてきました。



開園40周年記念イベント

8月31日(土) 森と動物の音楽祭 場所:大森山公園グリーン広場

公園と動物園が一体となって40周年前日・前夜祭を開催します。

昼の部では、秋田市立日新小学校、秋田市立秋田西中学校、秋田市立御所野学院中学校・高等学校の生徒さんによる華やかなプラスバンド演奏会を開催。また、劇団わらび座によるアトラクションや大森山動物園の動物たちが大森山公園グリーン広場まで散歩し、イベントを盛り上げます。

夜の部では、大森山公園グリーン広場で秋田にゆかりのあるアーティストたちによるJAZZライブを開催。フィナーレには出演者全員のJAZZセッションなどもあり、会場一帯に素敵な音楽をお届けします。お酒の提供もあり、ほろ酔い気分楽しめる大人に嬉しいイベントです。

【JAZZライブ出演者】

グルーヴィン・ハード ジャズオーケストラ、塩川光二 & THE CATWALK BAND feat 藤田陸、播東和彦BAND、meg & 北田一 Trio



8月31日(土) ランタン de ナイトズー 場所:大森山動物園

音楽祭会場のグリーン広場と動物園をつなぐ連絡路を特別開放し、ランタンに灯された道が登場します。動物園では「ランタンdeナイトズー」を開催し、園内もランタンで灯され、夜の動物園とは違う幻想的な動物園をお楽しみいただけます。

9月1日(日) 開園40周年を祝う会

開園40周年を迎える当日は、動物園ピクニック広場でイベントを開催します。会場では動物たちがギター演奏とともに来園者をお出迎えます。セレモニーや加茂水族館・大森山動物園・男鹿水族館3園館の連携発表会、写生大会表彰式、動物園の夢と未来を語る作文と標語の発表などを行い、フィナーレには秋田市立広面小学校「Crabひろおもて」によるヤートセが披露されます。

また、午後はライブやステージショーなどのイベントが盛りだくさん。このほか、動物たちやイメージキャラクター「オモリン」が園内を散歩したり、ミルヴェ館では加茂水族館・大森山動物園・男鹿水族館の施設紹介も行います。

第36回 親と子のふれあい 写生大会

36回目となる写生大会には、今年も多くの方が参加してくださいました。7月27日・28日の2日間で496点の作品が提出され、動物たちの特徴を上手に捉え、見応えのある力作がそろいました。この中から上位3賞、40周年記念賞を含め合計106点が入選し、入賞者は9月1日の開園40周年を祝う会で表彰されます。



市長賞 「さるやまでナイスキャッチ」 手形山幼稚園 石川獅生さん



市議会議長賞 「たくましいイタウン」 秋田市立旭南小学校 3年 三浦健太さん



教育長賞 「ほねをがぶっ! ヤマアラン」 秋田市立土崎小学校 2年 加賀谷多規さん



第39回サマースクール

大森山動物園で最も歴史のあるイベント「サマースクール」を8月1日と2日に開催しました。今年は、56名が参加し動物の飼育体験や、普段見ることのできない施設の裏側を見学する貴重な体験を行いました。

夜の動物園 8月14日～17日

イベント予告

- 大森山動物園開園40周年 前日・前夜祭(森と動物の音楽祭・ランタン de ナイトズー) 8月31日
- 大森山動物園開園40周年を祝う会 9月1日
- 秋の動物ふれあいフェスティバル 10月5日・6日
- いい夫婦の日 11月23日
- さよなら感謝祭 12月1日

飼育日誌

1/2 **チリーフラミンゴ** チリチリ 右肢が外反しているため、X線撮影。
 1/16 **ベンガルヤマメコ** シルバー♀ 動物交換のため福岡市動物公園に搬出。
 1/19 **アムートラ** ヒロシ♂ 雪の中を活発に走り回り、寝ころんだり、まんまタイムへの反応もよい。
 1/21 **アフリカゾウ** ダイスケ♂ 両前肢のターゲットトレーニング開始。
ピューマ びゅー太♂がびゅー子♀にマウント行動を繰り返す。
 1/27 **シバヤギ** パニラ♀ 信濃丞♂と同居。交尾確認。
ニホンコウノトリ 巢台で♂♀ペアがクラクラリングしていた。
 1/29 **シンリンオオカミ** 交尾体勢を3回確認。1回当たり20分～30分。
 2/3 **トナカイ** ♂(カイオウ、マオ)が柵越に角突き行動。
 2/4 **カリフォルニアアシカ** スミコ♀ 「触れ」のサインに自発的に胸をキーパーに寄せるようになった。
 2/8 **レッサーパンダ** ユウタ♂と陸♀の交尾行動確認。
 2/12 **ショウジョウトキ** 左黄♀ 砂場でうずくまり、右趾が凍傷を起こしていた。
 2/14 **ニホンイヌワシ** 信濃♂、たつこ♀ 盛んな交尾行動を確認。
 2/16 **サンショクキムネオオハン** コセン ケツメリクガメの甲羅に乗って遊んでいた。
 2/17 **ホンドキツネ** 前肢出しのトレーニングを開始。
 2/28 **ノドジロオマキザル** ヒマワリの種を入れたペットボトルを展示場に設置。夕方までに完成。
 3/7 **アライグマ** No.2299♂ 展示場から脱出。園内外を一斉捜索したが、発見できず。
 3/10 **トナカイ** カイオウ♂ 死亡。死因は誤嚥性肺炎。
 3/16 **エミュー** ガチャポンによるエサ販売を開始。通常開園スタート。ウエルカム動物(トナカイ、ポニーなど)で来園者を迎えた。
 3/22 **カピバラ** サツキ親子を屋外展示。日光浴を楽しんでいた。
ニホンコウノトリ ヒデタダ♂、ゴウ♀ペア 2個目産卵。
 3/23 **コモンマーモセット** 父ちゃん♂ 日立かみね動物園に搬出。
 3/26 **タンチョウ** ヒナ(H24生) 展示場入れ替え作業時に左肢骨折。
 3/31 **フンボルトペンギン** ヒナ5羽の生存確認(1日齢～17日齢)。鳥・豚のインフルエンザ監視体制解除。
 4/1 **ミニプタ** フリスビートレーニング開始。
 4/2 **ニホンイヌワシ** 2個採卵し、いしかわ動物園に搬出。
 4/5 **シンリンオオカミ** 最終交尾から63日目。♀の行動、外見に変化なし。
 4/6 **ミーアキャット** カネツグ♂ ぼかぼかハウスで休んでいることが多く、食欲もない。
 4/10 **コモンマーモセット** もも♀ 朝、2頭出産。授乳確認。
 4/12 **ライオン** ラガー♂ 麻酔下で爪切り。
 4/17 **アミメキリン** 寝室の砂の入れ替え。
 4/21 **アミメキリン** 飼育の日企画展「うんコレ2013」開催。
 4/25 **ホンドテン** ユウキ♂ 目の周囲と鼻の上が黒色の毛に変わっている。
 4/26 **ケツメリクガメ** カメハウスオープン。
ニホンザル サル山飾り木取り付け工事終了。
 4/27 **ピューマ** 最終交尾から93日目。♀の腹部の下垂なし。

4/28 **爬虫類舎** へびおみくじ好評。準備した65枚がすべてはける。
 4/29 **フライングケージ** ガチャポンによるエサ販売を開始。
 5/2 **ジャンボウサギ** H25出生個体の性別判明。♂8、♀6。
 5/3 **ホオアカトキ** ヒナの嘴と頭部の一部を確認。
 5/6 **インドクジャク** ♂1羽がディスプレイ、周囲に♀群が集まっていた。
ブレイリードッグ ロッキー♂ 動き活発。はらべこハウスにもよく上がる。
 5/9 **フタコブラクダ** 来来♀ 座らせることができた。顔にタッチング。
 5/12 **チンパンジー** ココ♀のお誕生日会。過去最高のリピーター数。
 5/13 **ツキノワグマ** ルビー♀、ルイ♀親子 展示場丸太に給餌した果実を必死に食べていた。
 5/16 **ラマ** アンナ♀ 寝室で出産。授乳も確認。
 5/18 **コクチョウ** 1羽ふ化。親子4羽で泳いでいた。
ラマ 5/16出生個体は♀で、「アンズ」と命名。
 5/21 **マーコール** 高台やぐらにルーサン設置。採食光景に驚きの声。
 5/22 **フラミンゴ** 本日から、屋外展示場に放飼状態にする。
ポニー マーブル♀ 死亡。死因は老衰。推定20歳。
 5/25 **アカコンゴウインコ** メレブ♀ 「おはよう、こんにちは、バイバイ」など言葉のレパートリーが増えている。
 6/1 **アミメキリン** 展示場柵に枝葉を設置。食べる光景に来園者が大喜び。
ニホンリス 出生個体3頭確認。(3月出生の可能性)
ニホンザル 育児放棄された出生個体の人工飼育を開始。春の動物ふれあいフェスティバル。四獣スペシャルなどを開催。
 6/2 **アミメキリン** デニーロ♂ 死亡。死因は肺炎。
 6/5 **アカカンガルー** フライトトレーニング。羽が抜け落ちている
モモアカノスリ せいか、飛び方が不安定。
 6/6 **アライグマ** 3/7脱出個体の園外一斉捜索。アライグマ見つからず、捜索専任体制を解除。
 6/7 **アライグマ** 秋田淡水魚研究会と合同で保全活動。朝から闘争多い。ポン♂の首周囲の毛がだいぶ抜けている。
 6/8 **ゼニタナゴ** オアシスに水を3回補給。2頭ともあつという間に飲み干した。
 6/12 **ホンドタヌキ** 2頭がプールで水浴びや頭を洗めるなどしていた。
 6/14 **フタコブラクダ** 小玉スイカを与える。スイカを持ち上げ床に叩きつけて割って、食べていた。
 6/16 **アフリカゾウ** 5/2出生ヒナ 止まり木間を力強く飛び移るようになった。
ノドジロオマキザル メイ(H24.5出生) 展示場で死亡していた。死因は不明(後日、精密検査)。
 6/17 **ホオアカトキ** H24出生ヒナ 衰弱ひどく、跼蹐立ち状態が続く。
カナダヤマアラシ ハナ♀ 初めで頭部にさわる。回避行動は見られなかった。
 6/22 **タンチョウ** パニラ♀ 2頭(♂、♀)出産。数回授乳確認。
キョン 風雅♂、風輝♂、千秋♂を猛禽舎に同居展示。
 6/24 **シバヤギ** 陸♀ 1頭出産。子の鳴き声にしっかり反応。
 6/26 **ニホンイヌワシ** マヤ♂ 久しぶりにジャンプトレーニング。
レッサーパンダ 軽快な動きをしていた。
 6/30 **カリフォルニアアシカ** ジェーン♀ 46回目のお誕生日会。食欲旺盛。
チンパンジー

へびおみくじ好評。準備した65枚がすべてはける。
 ガチャポンによるエサ販売を開始。
 H25出生個体の性別判明。♂8、♀6。
 ヒナの嘴と頭部の一部を確認。
 ♂1羽がディスプレイ、周囲に♀群が集まっていた。
 ロッキー♂ 動き活発。はらべこハウスにもよく上がる。
 来来♀ 座らせることができた。顔にタッチング。
 ココ♀のお誕生日会。過去最高のリピーター数。
 ルビー♀、ルイ♀親子 展示場丸太に給餌した果実を必死に食べていた。
 アンナ♀ 寝室で出産。授乳も確認。
 1羽ふ化。親子4羽で泳いでいた。
 5/16出生個体は♀で、「アンズ」と命名。
 高台やぐらにルーサン設置。採食光景に驚きの声。
 本日から、屋外展示場に放飼状態にする。
 マーブル♀ 死亡。死因は老衰。推定20歳。
 メレブ♀ 「おはよう、こんにちは、バイバイ」など言葉のレパートリーが増えている。
 展示場柵に枝葉を設置。食べる光景に来園者が大喜び。
 出生個体3頭確認。(3月出生の可能性)
 育児放棄された出生個体の人工飼育を開始。
 春の動物ふれあいフェスティバル。
 四獣スペシャルなどを開催。
 デニーロ♂ 死亡。死因は肺炎。
 フライトトレーニング。羽が抜け落ちている
 せいか、飛び方が不安定。
 3/7脱出個体の園外一斉捜索。
 アライグマ見つからず、捜索専任体制を解除。
 秋田淡水魚研究会と合同で保全活動。
 朝から闘争多い。ポン♂の首周囲の毛がだいぶ抜けている。
 オアシスに水を3回補給。2頭ともあつという間に飲み干した。
 2頭がプールで水浴びや頭を洗めるなどしていた。
 小玉スイカを与える。スイカを持ち上げ床に叩きつけて割って、食べていた。
 5/2出生ヒナ 止まり木間を力強く飛び移るようになった。
 メイ(H24.5出生) 展示場で死亡していた。死因は不明(後日、精密検査)。
 H24出生ヒナ 衰弱ひどく、跼蹐立ち状態が続く。
 ハナ♀ 初めで頭部にさわる。回避行動は見られなかった。
 パニラ♀ 2頭(♂、♀)出産。数回授乳確認。
 風雅♂、風輝♂、千秋♂を猛禽舎に同居展示。
 陸♀ 1頭出産。子の鳴き声にしっかり反応。
 マヤ♂ 久しぶりにジャンプトレーニング。
 軽快な動きをしていた。
 ジェーン♀ 46回目のお誕生日会。食欲旺盛。

お客さまの声

ミニプタ室内観覧者。「冬期の暮らしが観覧できて感動した。」

 アライグマまんまタイムを見て、「大森山動物園の動物たちは個性的でおもしろい。担当者の性格が伝わってくる。」

 キリンエサやり体験者。「動物を見つめる飼育員の優しい顔に感動した」

 子ども連れの夫婦。「大人も楽しめる動物園ですね。」

 ミニ干支展、へびおみくじの観覧者。「この企画はいいですね。」

チンパンジーお誕生日会のごちそうを見た観客。「わあ、すごい。どうやって作ったんだろう。何でできているんだろう。」

 ゾウトレーニング観覧者。「トレーニング光景を時間提示してまで見せる動物園はほかにはない。すごく感激した。」

 フライングケージエサやり体験者。「エサ販売が、ガチャポンになって楽しい。」

 サンショクキムネオオハンがケツメリクガメの甲羅に乗った光景を見た来園者。「いいところが見られてすごくうれしい。全国区で有名になれる。」

 アシカ情報板を見た来園者。「今日が誕生日なんだね。私と誕生日が一緒だ。」

かたばた通信 [編集後記]

動物園の40年を整理する中で、市の思い、市民の思い、そして動物園職員の思いを過去にさかのぼって知ることができました。そして、動物園が必要とされ、たくさんの方々の方々の応援があったからこそ今も成長を続けられることも改めて実感しました。
 本誌は、大森山動物園40年間の記録誌であると同時に40年の出来事を凝縮した情報誌でもあります。冊子を手に「動物園はこう変わったのか…」と今の動物園を感じたり、「昔はこんな動物がいたな」と昔の動物園に思いを馳せながら読んでいただくと嬉しいです。(保坂)

